

温古知新④ 堤中納言物語 1
笑顔礼讃西東

王子きつね句会様(東京都・北区) 2~3

はなみずき句会様(東京都・八王子市) 3~4

中野博夫様(埼玉県・上尾市) 5

投稿作品 6~9

心に残った作品 10

詠み人スクランブル(春の花で好きな花は?) 11~13

ニユースあれこれ 13

お客様の「リレーエッセイ」 和田澄子様 14

新潟ぶらり／北方文化博物館新潟分館／白山公園 15

詠み人の「リレーエッセイ」 俳人岸本尚毅様 16

4

April
Vol.49

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニユース

夜
楽

今回は春、スタートの季節ということで、古典がちよっと苦手、という方にも読みやすい(?)「堤中納言物語」のあらすじをご紹介します。

「堤中納言物語」は、平安時代後期以降に成立した短編物語集です。編者是不詳。十編の短編物語と一編の断片で構成されていますが、成立年代や筆者はそれぞれ異なります。なお、十編の物語の中に「堤中納言」という人物が登場せず、このタイトルの由来は不明です。

この中で一番有名なのが、「虫愛づる姫君」。タイトルは聞いたことがある、という方も多いのではないのでしょうか。そのあらすじは……。

蝶の好きな姫君の家の近くに、按察使の大納言の娘が住んでいました。この姫君は、「みんなが花や蝶を好むのはあさはかなこと。人には誠実さがあつて、ものの本質を探ることこそ、人柄がゆかしいのに」と言つて恐ろしい虫ばかり集めて、その成長する様子を観察していました。特に毛虫が好きで、手の平にのせて観察するほどでした。また、どんなことでも繕うのはよくないと言つて、他の姫君のように眉毛を抜いてまゆずみで書いたり、歯をお歯黒で染めることもしませんでした。親は、「気味の悪い毛虫を好んでいると世間の人に知られたら……」と心配しますが、「物事は根本を探つてから結末を見ることに意味があるのです。毛虫が後に蝶になるのですよ。絹も蚕から作られるのであつて、蚕が蝶になつてしまつたら、絹糸は作れません」と言つて、気にしません。

ある日、周囲の女房たちが姫の陰口をする中で、いたずら好きな上達部の右馬佐が、帯の端切れで作った蛇に、

はふはふも君があたりにしたがはむ長き心のかぎりなき身は「はいながらも、あなたのおそばにしたがひましよう。この長い蛇のようにかぎりなく長く変わらぬ心をもつ私は」

という歌をつけて姫君に贈ると、姫君が、

温古知新④ 堤中納言物語

契あらばよき極楽にゆきあはむまつはれにくし蟲のすがたは「縁があつたら生まれ変わつてよい極楽でめぐり合ひましよう。その虫の姿ではおそばにつきまといにくいから」

と返事をしたので、右馬佐は、何とかしてこの姫君を見たいと思います。そこで、友人の中將と二人で女装して姫君の家の近くに行くと、姫君が庭木に這つている毛虫を見ています。化粧はしていませんが、美しい様子。そんな中、お付きの者が右馬佐らが覗いているのに気付き、姫君に家の中に入るように言うと、姫君は木から落とした毛虫を袖の中に入れて家に入つてしまいました。

右馬佐が、せめて姫君を見たことだけでも伝えておこうと、

かは蟲のけぶかきさまを見つるよりとりもちてのみまもるべきかな「毛虫のように毛深いあなたの様子を見た時から、私がお世話をして見守りたいと思つています」

と歌を贈ると、

人に似ぬ心のうちはかは蟲の名を問ひてこそいはまほしけれ「普通の人とは違う私の心のうちは、毛虫ならぬあなたの名を伺つてから申し上げましよう」

という歌が返ってきます(実はこの返歌は女房の代筆)。右馬佐は、

かは蟲にまぎるるまゆの毛の末にあたる許の人はなきかな「毛虫と見まがうほどの眉毛をしたあなたにほんの少しでも比べられるほどの人はいませんよ」といつて笑いながら帰つていきました。

このお話、最後は「続きは二の巻にあるべし」と結ばれているのですが、続編があるわけではないようです。続編を考えてみる、なんて面白いかも!?

そのほかの短編も、それぞれに趣の違ったお話ばかり。古典が苦手な方も、ぜひ読んでみてください。(古川久美子)

新俳句人連盟 東京(23区)支部

王子きつね句会

1946(昭和21)年、民主主義日本文化の確立と発展をめざし、戦後いち早く平和と表現の自由を求め創立された新俳句人連盟は、全国各地に多くの支部と句会を擁しています。本日お邪魔する「王子きつね句会」もその一つで、句会の名前は大晦日には関東中の狐が集まるといふ伝説のある「王子稲荷」に由来しているとか。化かし合い?...さて男性9名女性5名の計14名でどんな句会が繰り広げられるのでしょうか。

1時過ぎ、すでに投句した作品を精記しそれを人数分コピーしている間に、諸連絡や連盟の近況など、司会の史朗さんが手際よく会を進行する。本日の披講は治風さん。3句出句の7句選、本日の席題は「学」。7句選のうち特選にはハートマーク♥をつけるところが何とも愛らし



▲1946年創刊の「俳句人」
通巻第587号



▲ホワイトデーも近いということで本日の賞品はチョコ♪

い。披講後、点数に拘わらず感想を述べ合う。指導者や主宰はおらず、一句ずつ順番にみんなワイワイと。

「今日は秀子さんデーだね」の言葉どおり、一番の高得点は2句とも秀子さん作。

8点

雪吊りの髻を解く越の風 秀子

一通り目を通し、まずこの句は採らないといけないと思っただけいな句／今日この髻という言葉覚えてた／断髪式等で髻を切ると聞いたことはある／兼六園は有名だが、東京の公園にもある風景／髻を解くことで春の音が聞こえてくるという、調べもいしきつちりとした句／春の訪れは太平洋側より日本海側の方が喜びも一入でしょう／秀子さんご自身も新潟出身で、春を待ちわびる気持ちが感じられる。

秀子：今年故郷は歴史的な里雪だったそう、新潟からお越しになると聞き挨拶句の意味もあつて詠んだ。

8点

朝東風や昨日職得しスニーカー 秀子

新卒者ならスニーカーではなく皮靴のはず。社会状況を考えるところを得ている／弾むように軽やかな気持ちちがスニーカーに感じとれる／まだ冷たい朝東風の中で新しい職に向かつていこうとする弾みがでている／スニーカーがいいのと朝東風の季語が本当に適切だと思った。

7点

引き潮の浜に目覚めの桜貝 国時

桜貝が効いていて春らしい美しい句／この句で成功しているのは「目覚め」。そこからの流れで桜貝に帰結している。俳句はこの変でストップするのがいいのかも／きれいで歌に出てきそう。こういういい方は悪いけど国時さんとは思わなかった(笑)。国時：目覚めたんです、これからは浜に目覚めの国時ですよ(笑)。

5点

沢庵の歯音春たつ握りめし 白樹

非常にわかりやすく楽しく春らしくていただいた／健康そのものの様子が伝わってくる／歯音に春が立つという表現がおもしろい／春だ、さあ握り飯でももつてどこかへ行こう！というアウトドアな若々しさを感ずる／沢庵を噛み切る音が、冬を脱し新しい季節へ向かう心持ちを感じる。

5点

空襲の風化憂いて三月尽 楽

何年経っても伝えて行かなければいけないことであり、現実的ないい句／嘆きながらも訴えている様子がわかる／さきほどの「下萌えに虫動き出しほつとする」「樹下も紅椿の花のうらやまし」の句でも言ったように「ほつとす」「や」「うらやまし」と同様にこの「憂いて」を使わずに句ができればなおいい／もう一つ肝心なのは、最近俳人もよく三月尽を使っているが本来は二月尽じゃないといけない。派生して〇月尽と使っているが、季語の使い方として安易かな、と。



4点

雪しずる陽のやらかな口づけに 史朗

溶けて行く雪が抒情的に詠まれている／春の来た喜びがよく出ている。まさか史朗さんの句とは思わなかった／同じく(笑)。竹下夢二の絵を思った／しずり雪ですね。やわらかな」とひらがな書きが効果的で景がよく見えた。でも本当に史朗さんかなーと(笑)／中七と下五で春の太

東西讚礼顔笑

陽を優しい語り口で詠んでいる。

4点

不学なり我歩幅なく雀の子 治風

自分の学のなさ、それをヨタヨタした雀の子の歩幅として見ている。弱点をおもしろおかしく詠んでいて共感した／雀は1年2カ月という寿命だが、年に4回子を生み雑草のようになくましい。不学と言いがらも本当は自信をお持ちの作者が謙虚に詠まれたのだと思う／動詞が2つありどっちがどっなの？といたくなる。季重ねと同じような約束事。1つの方が俳句としてしまる／「われ不学歩幅小さく雀の子」の方がスッキリして形が見える。

治風：深く反省しております(笑)

他には：

哲学堂色即是空春の雲

光夫

はつきりわからないがありがたい句だと思っていた(笑)／リズムがよくて、何となく春の感じが伝わってくる／「色即是空」の入った句を初めて見た／新俳句人連盟の創立に参加した橋本夢道の句に色即是空を入れたものがある。かつて月島にあるその句を書いた半折を中村草田男がじっくり見ていたことを覚えてる。

ひこばえや戦禍浴びにし大銀杏 宗一

3月8日を忘れてはいけないと、戦禍をくぐり抜け力強く芽吹いている銀杏が教えている／銀杏は火に強

い木。東京大空襲で焼けただれた銀杏だと戦禍より戦火の方がいいのでは？／いいと思っただけで銀杏とひこばえで季重ねでは？／「ぎんなん」は秋の季語だけど「いちじょう」は季語じゃない。

「俳句人」の生き字引ともいえる名誉会員白樹さんならではの発言をはじめ、とにかく80歳以上の先輩方のお元気なこと！〇〇さんの句だとは思わなかった、という類の発言も多く、まだまだ意外性を秘めつつ進化し続ける皆さま。各人が同じだけの声量を持ち、特に準備をするでもなく、思ったことをそのままポンとそこに落すように発言をされる。化かしあいは皆無、率直で謙虚で非常に居心地のいい会でした。(木戸敦子)



▲司会の史朗さん(右)と貞夫さん(左)
▼「いや、これは…」と仲睦まじい光夫さんと楽さん
◆本日の高得点秀子さん(右)と饒子さん(左)

はなみずき句会

主宰 藤沢樹村さま

(東京都・八王子市)

本日お邪魔するのは、八王子市絹ヶ丘1丁目自治会のシアズクラブの一つとして発足した「はなみずき句会」。この地に住む主宰の藤沢さんは、平成12年から指導に当たり今年で丸8年。弊社より句集「どの径ゆくも」、合同句集「はなみずき」1・2巻、結社誌「青枇杷」(季刊)、「戦地最後の初年兵」を発刊されるなど、精力的に活動をされている。

新宿より京王線準特急で36分、北野駅に降り立つと、開けていたコートの前を自然と合わせる程、気温の差がある。聞けば昔から「一寺(子)一度」と言い、高円寺 吉祥寺、国分寺、八王子と来るに従い温度が下がるのだとか。



▲藤沢さんの本の数々

1時の句会開始前に、既に笑顔満載の皆さまとお菓子の数々がお待ちかね。本日の兼題は「椿」の2句と当季雑詠

1句の合計3句提出、5句選。投句した作品を清記し、コピーを取りにいく間に茶話会。近況やら、2月に俳人協会の「自註現代俳句シリーズ」より刊行された主宰の句集が話題にのぼる。用紙が配られ、披講の一斑さんより各人が選をした5句が読み上げられる。

それを受けて主宰より「披講を一通り読み終えて今の一弥さんのように『以上、誰々の選です』と、最後にもう一度言うのは、最初に言っても聞き漏らすことがあるので親切で非常にいい。それとお客さん(この場合、不肖木戸です)の選は最後に言うこと、もう一ついえば一番年長で先輩の方、ここでは満子さんの選を最後にする、それが礼儀です。気を遣う人は、用紙を集めた際に順番を並べ替えてたり、『席順のとおりに披講させていただきます』、等と申し添える。そうすれば誰が最初で誰が最後か、いつも最初に読まれて軽く見られていくんじゃないか：等の文句も出ない。意外にいますよ、気にする人」。

「採っていただいた人は『藤沢樹村の句です、ありがとうございます』というべきところを省略して『樹村』と横着して小さな声で言うことなく、はつきりと名乗ること』と、句会における礼儀作法を話される。

その後、主宰選の入選14句、佳作



▲前はカラオケ・お酒付きの新年会だったそうで残念!

8句、特選7句が読み上げられ、途中で採らなかつた句に対しコメントを述べる。

光年をかけて来る星朧かな

「光年」は光の速さをいう天文学用語だよ。俳句のような短い中に生の言葉はあまり向かない。

落椿踏まれぬように奥にやり

「ように」ではなく「やうに」。「奥にやり」ってどういうこと? / 階段に落ちていたので根元のほうに: : : という意味 / それなら「寄せてやり」の方がいい。

春一番押える間なしスクランブル

何これ? / 帽子がスクランブル交差点で飛びそうだった / 帽子がないから何を押えるのかわからない / あまり具体的に言ったら芸がないかと(笑) / 「春一番帽子押えて交差点」それで十分、それ以上言うことはな

い。いろんなこと言おうとすると、何を言っているのかわからなくなる。

啓蟄の朝目覚めれば雨の音

目覚めればたいはい朝なんだよ(笑) / でも、先生素直に詠むのがいいっておっしゃったから(笑) / 同じような意味のことをこんな短い中に重ねて言わなくていい。くどくなる。きれいさっぱりさせること。「啓蟄や」で一回切った方がいい。

堀越しに微笑み覗く紅椿

「微笑み覗く」だと説明になる。「堀越しに覗く微笑み紅椿」とひっくり返しただけで全然違う。

重なりて色変わりゆく落椿

これも説明になっている。「落椿重なり色の変わりゆく」とした方がいい。

◎主宰の特選句

いつも行く散歩の道や木の芽風 栄子
雛あられ仏さまにも供へけり セツ子
雛の菓子食むには惜しき彩ばかり

一句男

子と遊ぶ若い父親水温む

澄子

招かれて爺の手みやげ雛あられ 健三

新しき人れ歯たしかめ雛あられきくを

雛あられは大丈夫だけれど、硬い豆が入っているのは気をつけたほうがいいよ(笑)。

地に触れてすぐに消えゆく春の雪

一句男

◎互選での高得点句

6点

椿落ち二人の会話ときれけり 晴美

非常にさびしい句で、季語とつきすぎ。特選にはいただけなかった。

我が町の香りとなりし沈丁花 健三

4点

やぶ椿黙してのぼる山路かな 美江

4点

彩色の小皿が似あふ雛あられ 一弥

「彩色」が気に入らないから、何色なのかがわからないから / 最初は彩色ではなく「小九谷」にしていたのですが

:/ 「小九谷の小皿が似あふ雛あられ」その方がずつといい、それなら特選にしたのに(笑)。

4点

配達の弁当に付く雛あられ 樹村

3点

春一番ひとり住ひに慣れにけり 満子

3点

ゆづり合ふ如くに咲きぬ山椿 満子

3点

地に触れてすぐに消えゆく春の雪

一句男

その後、質疑応答と続き、一人ひとりの疑問に答えていく。最後に「例



▲温厚でユーモアを交えつつピシャリとおっしゃる藤沢主宰(左)、きくをさん(右)



▲披露の一弥さん(左)と会の代表一句男さん(右)

えば、テレビで河津桜を見て詠むような『テレビ俳句』ってあるけれど、見もしないで頭の中で作る句はきれいな文句は並んでも、そこには実感も感動もない。下手でもいいから自分で見て作った句は訴える力がある。難しいことは何も言わなくても、自然にそのままに詠めばいい」と締めくくる。

■地域の自治会のサークルとして発生した会は、カラオケやコーラスの会などもあり、他の会での交流もある面々は気心の知れた仲。ほとんどの方が同じ町内にいるから、買物やちやうとその辺りで会うこともしょつちゅうなのだとか。「人は安心できる環境で一番よく学ぶ」そうだが、まさに家庭的な雰囲気の中、伸び伸びと楽しんで俳句を作っている。俳句にしろカラオケにしろ、町内のその道に通じた人に教えを乞いつつより人生を楽しもうという姿勢。土地と互いの温かいまなざしに見守られた素敵な会でした。

(木戸敦子)

笑顔礼讃西東

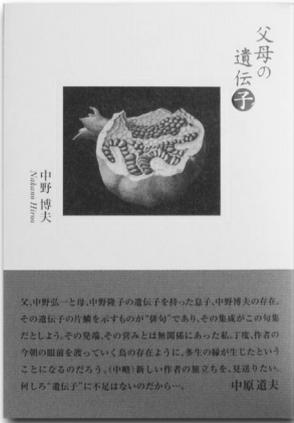
中野博夫さま

(埼玉県・上尾市)

昨年12月、句集『父母の遺伝子』を出版された中野さんは、38年間旭化成に勤務され、研究一筋できた生粋の技術者。句集完成間際には癌の手術をされ、以来約3カ月。大柄な体軀をラフな服装で包み、軽やかな足取りで現れた。聞けば、この後大宮公園に吟行に行かれるとのこと。



▶新聞・雑誌への投句も戦略的ですが理系の頭脳派！



▶装丁・序文は中原道夫氏、跋文は齋藤美規氏といずれも新潟出身の俳人による。

■吟行はよく行かれるのですか？

行くところは大体決まっています、平日は無理なので土・日は99%吟行に行っています。花と小さい虫が好きなので、詠いたい季節がありそうなどころに足を運び20〜40句くらい作り、帰って夕飯までの間に推敲し、どれをどこに投句してと裁断し、月曜までにハガキを出し終える。今朝散歩した時に作った句はこの中に入っています(と、携帯を指差す)。

■ずいぶん行かれるのですね

ものを見て作らないと俳句にならないから、作るために行くというか、行かないと終わらないという習慣になっている。特に自分に課しているわけではなく、行きたいんですね。この前も大阪にいる娘と孫に顔を出すふりをして、あとは琵琶湖方面に吟行(笑)。もともと一人でいることや、一人で考えることが好き。全国紙4紙と地元新潟日報、彼は雑誌数誌に投句しているので、吟行に行かないと数が間に合わない。

■俳句歴は長いのですか？

小学校6年生の時に授業で作った「初雪や俳句を作る四時間目」という句雪や俳句を描いてくれた友人は言うのですが、全く記憶になし(笑)。以来50年、大学は東北大学工学部に入り、卒業後は旭化成に入社し、川崎、延岡、アメリカと仕事一辺倒で俳句の「は」の字もなかった。アメリカから帰国する際、何か定年後も楽しめるものはないかと考えたとき、ごく自然に俳句なら何とか

なるかと思った。新潟では名の知れた俳人だった父の影響があるのかもしれない。

■お父様から俳句の手ほどきは？

全くありませんし生きていた間に俳句の話はしなかった。新潟日報に勤めていたが大変な巨漢で相撲部屋から勧誘に来たほど。よく家で酒盛りをしながら句会をしていて、勉強の邪魔になるし逆にいい印象はなかった(笑)。今なら親爺だったらこの句をどう批評するのかなと思ったりするけど。

■句集タイトルの遺伝子を感じることは？

祖父も親父も自分も、普段はおとなしいのにカッとすると烈火の如くという性格、これは間違いなく受け継がれている。残念ながら息子にも(笑)。理系人間なので畑違いだったが、俳句にスツと入っていたのは遺伝子のせいかもしれない。父は51歳で亡くなったが、俳句を始めようと思ったのもちょうど同じ歳の頃で、バトンを受け取ったような気持ちも少なからずある。

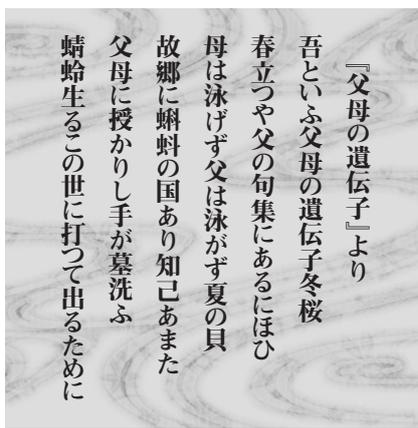
■句集をまとめようと思ったきっかけは？

自分自身も長生きをしたと思うけど、もしかしたら先が短いかもしれないと思ったこと、生きた証を残したい、そして結構句が溜まったからですね(笑)。どこかに入選した句しか入れていないが、遺したい句は本当は別にある。それもいずれは句集にまとめたいと思っている。

■これからは…

研究者として新しい糸を開発したように、いつか新しい評論を書きたいと漠

然と思っている。少なくとも親爺の俳句に関しては書けそうだから、手始めに親爺と自分の句を比較して書いてみたい。地元新潟の五頭山麓に「やまびこ通り」というところがあり、そこに親爺の句碑がある。隣に自分の句碑を建てたいというの夢。それと、俳句はすべて挨拶。そういう意味ではどこに行っても花でも虫でも人でも、何を見ても会話ができるようになりたいな、と思っています。



『父母の遺伝子』より
吾といふ父母の遺伝子冬桜
春立つや父の句集にあるにほひ
母は泳げず父は泳がず夏の貝
故郷に蝸蚪の国あり知己あまた
父母に授かりし手が墓洗ふ
蜻蛉生るこの世に打つて出るために

★旭化成で世の中になく新しい糸を作ったかったという入社当時の夢は、エイズ等、血液中のウィルスを除去する世界初のフィルターの企画・開発を通して結実し世に出、この研究で博士号もとった。30から40代の頃にはフルマラソンを9回完走し、宗兄弟、谷口とも一緒に走ったことがあるという。一つ決めたなら一直線にひた走る。新しい糸が実現したように、父から無言のうちに託された宿題を成し遂げるもう一つの大仕事は、既にスタートしているようだ。

(木戸敦子)

投稿作品

※今月も、みなさまから沢山のすばらしい作品を投稿していただきました！
今後も、みなさまの投稿をお待ちしております。
次回掲載分は5月14日(金)締切です。

俳句

- 1 碑の裏に廻れば小春かな
小林正男(新潟県)
- 2 庚寅祝う神籬雪催ぬ
野木宗信(奈良県)
- 3 訪へば画廊一つ気に春爛漫
林多み子(群馬県)
- 4 雛壇の裏側に子の隠れたる
小野正光(宮城県)
- 5 志高く持ちたし日脚伸ぶ
井原毬子(東京都)
- 6 煮凝を肴に俳号替へし友
小島岳青(新潟県)
- 7 せせらぎの瀬音清しき春立てり
山川みどり(山形県)
- 8 裸木や雲のかたちに動悸して
木山杏理(東京都)
- 9 修行僧魚板の響き風光る
檜山とり子(東京都)
- 10 今年酒一世はるかに重かりし
五十嵐勝敏(新潟県)
- 11 招福は身の内にあり冬牡丹
野別忠孝(埼玉県)
- 12 潮騒の届く岸壁野水仙
佐瀬子エ子(神奈川県)
- 13 心の鍵外せぬままに春立ちぬ
加藤三陽(埼玉県)
- 14 龍の玉龍馬の像を取り巻きて
浜田蛙城(静岡県)
- 15 なりはひの押しかけて来る春真中
福岡悟(東京都)
- 16 船頭の白慢の喉や雪山河
松涛千鶴子(東京都)
- 17 母百歳手に余りたる年の豆
大久保アヤ子(東京都)
- 18 歌舞伎座を出て淡雪の銀座かな
有坂馨園(福島県)
- 19 凍大根人住む気配古軒場
高橋トミ子(山形県)
- 20 かたちあるものに影あり日脚伸ぶ
吉田未灰(群馬県)
- 21 青山に齢をかさぬ初山河
佐野和彦(静岡県)
- 22 村里の茶坊の窓や春の雪
大場きよし(宮城県)
- 23 垂矢歌う温故知新や梅開く
大橋恒次(新潟県)
- 24 少年の眼に雪の白さかな
小野寺裕子(宮城県)
- 25 春の月浮かしておりぬ銀世界
村木尚(新潟県)
- 26 笹子鳴く方へ日の寄る目玉焼
鈴木岑夫(千葉県)
- 27 楊貴妃の風骨結ぶ赤い糸
三津木俊幸(千葉県)
- 28 雲を呼ぶ民話の里の柿すだれ
野呂瀬則子(愛知県)
- 29 旅の夜の小膝にせまる山の冷え
乾久子(滋賀県)
- 30 親も子も狐に化ける津川かな
星野三興(新潟県)
- 31 鬼逃げる駒のいななき胴震い
久世しずか(埼玉県)
- 32 菜畑の抜き差しならぬ霜日和
西村けい(茨城県)
- 33 道に出て亡き妻を待つ秋の暮
佐藤茂三郎(千葉県)
- 34 過ぎし日の愛を確かむ花野径
池戸喜美子(長野県)
- 35 沈丁や友と別れし夜の名残
羽根田明(神奈川県)
- 36 立春の愁まつわる落暉かな
山火白沙(岩手県)
- 37 乾坤は色紙はみ出す春の色
浦橋渴雪(兵庫県)
- 38 波の花策に干さるる魚の腸
川口襄(埼玉県)
- 39 男坂登つて行けり梅の宮
須田洋子(埼玉県)
- 40 人呼んで鴛鴦といふ首そらし
和栗痴龍(新潟県)
- 41 この街のこうとうに惚れ五十年
菅井文男(新潟県)
※こうとう「新潟の雑煮の呼び名」
- 42 春彼岸浮き世離れて暮したい
忍正志(兵庫県)
- 43 椽の木にひととき春の迷雪
岩脇五風(三重県)
- 44 避け難きさだめを生きぬ岩燕
藤本由美子(兵庫県)
- 45 笑尉浮きつ沈みつ春の海
小俣英之助(大阪府)
- 46 筋肉の衰ひ思ひつ雪を掻く
梶鴻風(北海道)
- 47 歓声へ辛夷たちまち湧くやうに
寺尾亜真李(新潟県)
- 48 大根の白き手ざわりうらやまし
奈良重子(茨城県)
- 49 白梅にうぐいす来たり良き日かな
河合ヤスエ(大阪府)
- 50 抱かれて触れたき母の暖き肌
伊藤修敬(三重県)
- 51 春の雨ミモザ蕾を増やしけり
沢紅子(岡山県)
- 52 枯木にも華やぐということありし
内河邦久(東京都)
- 53 音もなく春の来ている町の川
早矢仕邦夫(愛知県)
- 54 日の色とひとつになりし福寿草
秋谷静子(茨城県)
- 55 昇進というも单身春愁
長峰正晴(千葉県)
- 56 去年今年煎じ詰めれば惚けにけり
暉峻康瑞(鹿児島県)
- 57 恋猫に開かずの扉ありにけり
寺尾令子(東京都)
- 58 紅梅や齢はんなり重ねたし
紺谷睡花(東京都)
- 59 筑紫晴れまず飛梅の匂ひ出す
吉村筑紫(埼玉県)
- 60 重ね着の母ふところの手毬唄
棚橋麗未(東京都)
- 61 春一番簞笥に妻の黄八丈
津田忠彦(岡山県)

- 62 古城跡槍一徹の蜂籠る
佐藤君夫(千葉県)
- 63 好きな花また一つ増ゆサイネリア
能條憲夫(神奈川県)
- 64 老梅の蕾ふくらむ二三つ
椿原富久子(大阪府)
- 65 寒冷の中女子マラソンの頼もしき
小原登志子(大阪府)
- 66 小鳥屋の窓辺にふくら雀かな
片桐ひとし(北海道)
- 67 北風関東平野を翔ける夢
酒井郁郎(埼玉県)
- 68 アボガドの球根植えて愉しめり
矢野絹枝(東京都)
- 69 鳳凰の色は緑青春の空
四宮陽一(京都府)
- 70 懈怠して猫に膝かす春炬燵
山本直子(大阪府)
- 71 惜景と紅葉浮かべし露天風呂
杉村美保子(岩手県)
- 72 風あれど光りの春となりけり
浅倉里水(千葉県)
- 73 雪が舞ふバンクーバーの涙かな
坪田勝秀(鹿児島県)
- 74 さう言へば豆撒く父の声若し
大谷茂(埼玉県)
- 75 生命の機微をつぶさに冬木の芽
山東爺(北海道)
- 76 梅咲いて去年の笑顔の夫想ふ
近藤利子(京都府)
- 77 立喰いの駅そば忙し鳥曇り
田島星景子(宮城県)
- 78 生が死に昔を語る彼岸入り
千代田栄次(東京都)
- 79 七十路いつ果てるやら春思かな
中川平治(東京都)
- 80 鶯の渡る畦や一揆村
古郡孝之(埼玉県)
- 81 天界を引き寄せ風の冬桜
長尾俊彦(香川県)
- 82 鬼払い佳きこと一杯御座候
佐野しづ子(愛知県)
- 83 トランペットその高音にぶら下がる
辻升人(東京都)
- 84 餅肌にごねて粘土の雛かな
星一子(神奈川県)
- 85 絵の様な音楽のごと雛和菓子
磯部力(新潟県)
- 86 安産の声に安らく去年今年
堀田寿美子(北海道)
- 87 寒明くる人形腫かがやけり
竹本芙美子(新潟県)
- 88 たつぷりと三河の匂い干大根
磯村鉄夫(愛知県)
- 89 天領の真水で搗きし鏡餅
田中昶(鳥取県)
- 90 初太鼓禰宜の祝詞の恭し
居原田連星(大阪府)
- 91 廃屋を住家に仔猫生まれけり
竹内ハヤ子(埼玉県)
- 92 鬼は外間を貫く若き声
三ツ木宗一(東京都)
- 93 春眠を誘ふボサノバ美容室
大阿久雅子(東京都)
- 94 赤き実の地に点点と春の雨
川崎洋吉(福岡県)
- 95 還付金標万なにがし鮫鱈鍋
井上静夫(栃木県)
- 96 入口かんじきに く野鳥園
伊藤良三(岩手県)
- 97 ふと目覚め眠れぬまゝの作句かな
木村俊彦(奈良県)
- 98 梅が香や温い妻の手散歩路
百花清(埼玉県)
- 99 春うらら赤白黄色散歩道
早川述史(愛知県)
- 100 うすづきて町に野焼きの匂ひかな
津布久信雄(東京都)
- 101 夕さればひとり法師の雪だるま
増本和子(千葉県)
- 102 暁鐘の寺千本の梅咲かせ
牧野桂一(大分県)
- 103 待春の心ときめく旅の地図
沢井 博(群馬県)
- 104 ダイヤモンドダスト燦々鶴ヶ城
結城良一(福島県)
- 105 春立つやひらがなだけの便りくる
堀たかこ(大阪府)
- 106 手鏡のつばやき聞こゆ春裕
野村牟人(東京都)
- 107 春コートなびかせ君を待ちし浜
柚山美峯(東京都)
- 108 天上の妹いもへの手たむ向け雛飾る
大下志峰(福井県)
- 109 インフルエンザ殺菌液が出口にも
藤沢樹村(東京都)
- 110 声のみは明るく余後の唇寒し
今井温子(奈良県)
- 111 静寂を破る雨音雪の堂
神作洸江(埼玉県)
- 112 山の端を廻りて来たる雪しまき
湯浅芳郎(岡山県)
- 113 幼子に読んで聴かせる初神籤
山岸伊久雄(東京都)
- 114 日溜りの猫に敵視で迎へらる
有本正嗣(京都府)
- 115 富士を置き農夫一途に畑打つ
寺岡文生(静岡県)
- 116 初みくじ手の切れそうな凶が出る
原田麦吹(埼玉県)
- 117 寒明けるいまだ炊の水硬き
安藤まこと(岩手県)
- 118 縫ぬいるものなにもない空春兆す
村松知津子(大阪府)
- 119 ふんわりと肌に風花受けてみよう
富樫和子(山形県)
- 120 梅ひらき心ひらくと思ひけり
木村真澄(埼玉県)
- 121 啓蟄やうずく地中のテレパシー
大塚徳子(埼玉県)
- 122 初びなをみつめて嬉れし孫むすめ
中村和弘(愛知県)
- 123 溪音に紅の明らむ藪椿
川島萌(高知県)
- 124 囀りの森に吸われし試歩伸す
上谷すみゑ(神奈川県)
- 125 転がしてまた転がして雪だるま
布目雅之(埼玉県)
- 126 涅槃西風廃校知らぬ定礎石
濱田イサオ(福岡県)
- 127 女にょはん犯なきテロ者も咎も夜の霧
諏訪杜夫(埼玉県)
- 128 書き留めの句帳の一つ多喜一の忌
高杉杜詩花(北海道)
- 129 花辛夷どれも光の方を向き
中野博夫(埼玉県)

投稿作品

- 130 春深し少女の笑くぼなほ深し
阿部幸子(宮城県)
- 131 み仏の口もほころぶ梅開き
渡邊昭雄(東京都)
- 132 庭下駄の庭より知らず山笑ふ
田中敏晴(奈良県)
- 133 木に詫びて椿一枝を盗みけり
村瀬憲正(岡山県)
- 134 ものの芽のはや青みたる土の顔
野原香雪(北海道)
- 135 禍はさう思ふこと枯野行
岩村昇(神奈川県)
- 136 祖父祖母を好きと孫云ふひな祭
松山智恵子(宮城県)
- 137 声立てて涙拭へり初笑ひ
稲葉節子(静岡県)
- 138 一步退くことも良きかな春の月
北嶋八重(京都府)
- 139 春光やフランスパンの芳しき
西出敏子(千葉県)
- 140 山笑ふ展望台へ古稀の足
油谷郷史(兵庫県)
- 141 春氷水ひたひたと相寄りぬ
神一男(静岡県)
- 142 トンネルを抜けて色なき風の音
菊池シュン(青森県)
- 143 気の通ふ友ある幸や花の兄
宇田川正雄(埼玉県)
- 144 木々芽吹く頃合い見てか研師来る
佐々木トモ(宮城県)
- 145 春の雪お気の済むまで降るがよし
延原令岱(岡山県)
- 146 残雪の比良を写して湖の紺
西村幸子(滋賀県)
- 147 認知症恋心持て冬泉
栗原啓子(埼玉県)
- 148 春が来た女系家族に男の子
近藤美好(新潟県)
- 149 ぶらんこに残せし言葉揺れてをり
藤田昭代(岡山県)
- 150 何処からか水の音する猫柳
望月哲土(東京都)
- 151 宿命に素直に咲けり寒牡丹
鏡たか子(山形県)
- 152 便秘して考へる人長老す
大井光隆(神奈川県)
- 153 うま酒に足も千鳥の春の宵
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 154 里山路枝の曲りや春の露
北野耕兵(千葉県)
- 155 キャンデーを銜えて母娘初詣で
木下精(大阪府)
- 156 初空や指かざし描く夢の文字
三浦八千代(千葉県)
- 157 遠屋根に白残りをり梅開く
清まさじ(静岡県)
- 158 就中桃青翁に風信子
炭崎博(滋賀県)
- 159 羅漢さまの内緒話や春隣
小田眞佐代(大阪府)
- 160 ずんぐりの鴨が一番よくもぐる
大窪美代子(大阪府)
- 161 卒業式送るブラバンアンコール
柳澤京子(宮城県)
- 162 挨拶のきつかけありて名残雪
藤井春三(埼玉県)
- 163 日脚伸ぶ駅に青春切符買ふ
安達輝美(山口県)
- 164 新しき春苗の香を束ねけり
越智麦州(東京都)
- 165 春耕の田はゆつくりと息を吐き
鈴木蝶次(宮城県)
- 166 賀状にも強きの人柄あらわれる
吉野成行(愛知県)
- 167 雲はれて紅梅の色なを増せり
橋本まこと(栃木県)
- 168 目が見えてゐるから笑ふ露の臺
柏田浪雅(東京都)
- 169 二月尺東に白き大さ月
池本勇(大阪府)
- 170 囁りや嘘偽りのなき言葉
長島保子(東京都)
- 171 春光の充てるや花舗の大鏡
今井勝子(新潟県)
- 172 路の臺摘む後より犬の顔
小山たけし(埼玉県)
- 173 賽銭の指よりこぼるしはれかな
白鳥光雄(青森県)
- 174 春北斗父の忌日の近付きぬ
吉澤昌美(長野県)
- 175 雪解や生え出て給う福寿草
酒井多ま恵(岩手県)
- 176 紅梅の仏の道に続きおり
吉村充治(埼玉県)
- 177 解くものは雪のみ瓶の欠片かな
安部龍太(山梨県)
- 178 霞立つビートルハウス一望に
堀本和子(大阪府)
- 179 嬰兒のよちよち歩きふきのとう
宮川昭男(高知県)
- 180 梅が香を打消す濃き香沈丁花
長谷部喜代子(大阪府)
- 181 古雛を飾る格勤の母子かな
古谷力(東京都)
- 182 惜しみなく降る花吹雪満身に
小原わ子(大阪府)
- 183 幾万の祈り石に芽木の風
竹澤茂子(大阪府)
- 184 春浅し少し美人に自画像描く
伊藤みさ(静岡県)
- 185 啓蟄やしがらみ脱いで八十路旅
植野無人(兵庫県)
- 186 大量に一枝投げ入れ春を待つ
野中信夫(東京都)
- 187 しとど降る雨に萌え立つ春の山
春口蓮男(静岡県)
- 188 さくらさくら方向音痴の疾風です
椋本望生(大阪府)
- 189 ふらここやママの背中にもみじの手
高垣勝代(大阪府)
- 190 逃水の憩ふ山陰ありにけり
新井竜才(埼玉県)
- 191 亡き夫の座に犬がゐる炬燵かな
青木涼子(埼玉県)
- 192 早池峰を駆け回りたる熊なりし
石川清(岩手県)
- 193 啓蟄の事務室にゐて電話とる
佐藤信(神奈川県)
- 194 余生にもときめき欲しき春の風
岡村君枝(茨城県)
- 195 六尺を余る長屋の軒氷柱
平山千江(岩手県)
- 196 冴え返る降神の儀の声太し
清水令一郎(神奈川県)
- 197 春耕の田に鳥達のみあたらす
塩田澄子(千葉県)

- 198 冬椿ためらひながら来る齡
池上秀子(高知県)
- 199 書初や孫に五常の真を説く
森崎榮久(岡山県)
- 200 軒雀ころがる様に春一番
鰐部好三(愛知県)
- 201 もくれんは白き炎を上げ旅なかば
山本せつ子(鹿児島県)
- 202 うす氷写りしかげの老いたるや
加藤光子(山梨県)
- 203 憶い出を思い出として雪中花
池田岬(埼玉県)
- 204 紐に紐結びし絵馬や梅ふふむ
秀川淑子(島根県)
- 205 二の足を踏む春泥の文化財
佐藤美美子(神奈川県)
- 206 絵画展作者のころ垣間みる
岸田晴代(奈良県)
- 207 よろこびを拡大コピー合格子
萬濃その子(千葉県)
- 208 啓蟄を待てずに鉢の虫二匹
小林七重(新潟県)
- 209 パン屑で消す己が眉卒業期
織田粽太(千葉県)
- 210 失せしもの夢に見つけて亀の鳴く
貝沼とし子(愛知県)
- 211 堪えねばならぬものあり一寒梅
中山日出子(大阪府)
- 212 春寒や朝一番の渡し舟
関口修一(群馬県)
- 213 瀧櫻枝垂れし先の大支え
齊藤安弘(神奈川県)
- 214 不本意な名前ですよろし犬ふぐり
大村翔児(愛知県)

- 215 春風神木どくと倒れけり
杉浦俊雄(静岡県)
- 216 妻呼べば木霊ばかりの春の山
田野井一夫(栃木県)
- 217 香りして振り返りみる沈丁花
出井静枝(三重県)
- 218 春の雪大地ゆるがせ落ちる音
直原茂樹(岡山県)
- 219 喜寿の旅傘寿へ一歩花菜道
吉澤八千代(群馬県)
- 220 髯まだき孫からもらふスイートピー
堀井和(神奈川県)
- 221 木仙は静かに閉じる麗わしや
五味田幸夫(神奈川県)
- 222 子は誰も家業は継がず冬桜
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 223 父と子と二合の酒や水温む
井田利子(宮城県)
- 224 ほんとだよぞろ目の歳や四月馬鹿
福田和子(東京都)
- 225 津波くる料峭の月赤を帯び
中岡昌太(神奈川県)
- 226 房州に雪舞い降りて春隣
針生清(千葉県)
- 227 春雪の驚く程の降りつぶり
本間七窪子(山形県)
- 228 最上川左岸右岸に残る雪
鈴木与平(宮城県)
- 229 フランスパンぱりつと焼けて二月尻
石倉政子(滋賀県)

短歌

- 230 新年の蠟燭灯す祭壇は夫の好みのバ
カラの燭台
高橋邦子(高知県)

- 231 ガン告知せぬまま妻の手術終え町
検診のお陰と今は
齊藤真一(秋田県)
- 232 枯葉舞いわが心とはうらはらにふり
向きもせず季は移りゆく
田邊美代子(三重県)
- 233 離れ住むわれを気遣い受話器から
孫たちを呼ぶ嫁愛しくて
岩崎令子(大阪府)
- 234 地球儀にハイチの位置をたしかめて
二十万死す地震の脅威
小島秀雄(福島県)
- 235 母の齢まであと七年と気づきし今
宵俄かにこころ乱れて眠れず
木暮珣子(群馬県)
- 236 人を待つ茶坊の窓はくだり坂おりの
舞妓にさくらはなびら
久保和友(滋賀県)
- 237 ひとなみに平均寿命生きなむと五
年もの日記またもあがなふ
黒澤正行(福島県)
- 238 日本でうけるのは顔のいい男よ日本
に顔のいい男を沢山送って
梅澤鳳舞(埼玉県)
- 239 韓国の祝いの席のアリランか風なく
夜は佐渡に聞こゆる
土屋喜雄(山梨県)
- 240 藁ボッチかぶりて並ぶ寒牡丹赤布垂
るる地蔵のごとく
今井忠一(東京都)
- 241 天国も大雪ですかと問いかける写
真の中の義父の笑顔に
若月理依子(新潟県)
- 242 みちすみに家のすみれの咲きゐると

- 告げきて孫はいそぎ水やる
鈴木清美(愛知県)
- 243 豪雪の屋根に上がりて雪下ろし気
力を込めて昭和一桁
山本敏順(長野県)
- 244 日中は寒さやはらぎコートぬげば早
咲き水仙の香りただよふ
高須敬(愛知県)
- 245 水牟の跡と伝える岩穴の奥より轟
く春の水音
青木日出男(群馬県)
- 246 八掛の色ははんなりこれしかと亡母
の笑顔やトキ見て思う
佐伯セツ子(香川県)
- 247 登校の児等にマスクの姿あり新型イ
ンフルこわいこわい
藤原昭三(滋賀県)
- 248 丑年の丑年生まれこのわれに可愛い
孫の生まれたりしを
小暮昭司(群馬県)
- 249 街いちめに霧たちこめるかううじ
て見定め得たり青の信号
北岡晃(兵庫県)
- 250 梅の枝はほのかに紅く染まりおれど
開花まだ遠き二月雪空
桑原謙一(群馬県)
- 251 すこやかにのびのび育てみどり子よ
君の未来は無限大なり
武藤弘美(埼玉県)
- 252 孫抱きてサーカス観おれば時おりに
わが腕掴む幼きちから
千木良宣行(埼玉県)
- 253 歩くために歩くむなしさ沈む陽が
徐々に楕円となりてゆくなり
後藤美佐子(長崎県)

254 曲あるも親しみ深き父の字に似て
きたりしを確と受けつぐ
椎忠夫(神奈川県)

255 鮫鱈のふはりふはりを妹と食む海
はどどどと巖打ち狂ふ
堀井醉人(茨城県)

256 開放の認知病棟一室に置かれし若
き兵士の写真
寒川靖子(香川県)

257 黄泉に棲む同級四人をしのびつつ今
日から吾は七十五なる
佐藤古城(埼玉県)

258 丈低く咲く寒アヤマの色清か着せて
やりたし藁のマントを
吉澤貞子(愛知県)

259 今ここに僕の全てを投げ出して心の
夢を君に捧げる
安木沢修風(新潟県)

260 うぐいすの便りと共に春がきてさあ
はじめようしゆみのおはり
田村淳子(新潟県)

261 凶作に餓死せし墓に苔むして無縁
佛に思いめぐらす
伊藤萬泉(岩手県)

262 V字にて飛び立つ白鳥の餌もなくし
て哀愁の声
三浦博(岩手県)

263 雪里を離れ街へと戻来れば雪やとも
旅、街、白染む
小黒深雪(新潟県)

川柳



264 見え透いた世辞でも嬉し注ぎこぼし
石原学(群馬県)

265 本年もポッケにたんち褒めこぼし
田澤宏(新潟県)

266 家中を静かにさせし曾孫昼寝
大江秋月(兵庫県)

267 せり噛めば近づいてくる遠い人
辻直子(東京都)

268 ミンジー夏を教える蝉時雨
樋口孝子(新潟県)

269 蓮根は泥のプールで水を抜け
大川聡(新潟県)

270 筋書きにまた朱を入れている暮らし
小川賀世子(東京都)

271 夕焼けに帰るカラスのシルエツト
宮崎正男(群馬県)

272 灯台はかもめの遊ぶ遊園地
工藤昌見(山形県)

273 ついに来た弾みつかずにささえいる
近藤はつみ(福岡県)

274 登校拒否他人の痛み分かる子に
小山恵美子(大阪府)

275 逆風に耐えてみせます案山子です
高柳閑雲(愛知県)

276 まだ古稀か笑われている針灸院
中村雄昂(東京都)

277 秘書だ秘書だから議員は辞められん
中森儀雄(三重県)

278 生涯が青春だった父忌明け
藤井碩子(山口県)

279 片想い逢える予感の廻り道
大岩歌子(岡山県)

280 鬼の面被つてみても一人きり
勢藤隆(群馬県)

281 今までのお返しさせて長生きまで
大橋絵代(千葉県)

282 亡き父の財布を空にした一人
鈴木義雄(福島県)

283 ザル法をつくる性善説の罪
大竹和男(新潟県)

284 老母と居るホテルのような新病棟
森本遊笑(兵庫県)

285 八十路 like ほどほど俳句詠む
小野武雄(群馬県)

286 恙く非常食糧期限切れ
木村誠一(神奈川県)

287 コンパクト皺をそのまま映しすぎ
山崎一嘉(愛媛県)

288 正の字を書いて飲みすぎ自重する
北村富士雄(新潟県)

289 弓なりの日本列島花北上
野田明夢(新潟県)

290 先だたれおろおろ男他愛ない
藤井北灯(福岡県)

291 今日も行くと母の残したりリュック背
に
小林恵子(大阪府)

292 涙腺の脆さおかしくても溢れ
天広愛子(広島県)

293 みすてない医師のことばにあかり見
る
奥那於子(大阪府)

294 人間も会社もボロボロも崖の上
高原まさし(福井県)

295 出番無い背広ダンスで大欠伸
中嶋秀次郎(埼玉県)



「や」で切らない方がいいと思うが「幸せ色に煮える」という言い方が作者の温かみを感じさせる。紺谷睡花(東京都)・おでん好きな小生には、シンプルで堪えられない情景です。渡邊昭雄(東京都)・感性が鋭く、共感を覚える。五味田幸夫(神奈川県)・日本人でなければできない表現と思ひ感慨深し。能條憲夫(神奈川県)・真白い大根が時間と共に色がつく様子が夫妻として捉え読みました。煮込めば煮込むほど色がでます。鈴木義雄(福島県)・身近な日々の生活を句材にして成功している。「幸せ色に煮えてゆき」が何とも云えず良い。山岸伊久雄(東京都)・大根のおいしく煮るのは大変です。清まさじ(静岡県)・大根の煮物は自分でもよく作ります。「幸せ色に煮えてゆき」が何となく解ります。星一子(神奈川県)・大根は「不味」ものでなく「何にもよくなじむ」もの。人間もその土地環境に順応するもの。長い年月を経て好い味の間人になりたいたいの。菅井文男(新潟県)・大根は冬野菜でも一番好きな野菜です。いかにおいしさが伝わって来る句です。伊藤みさ(静岡県)・味

がしみてゆく過程を「幸せ色」と表現されたことで家族の笑顔まで浮かんでくる 竹澤茂子(大阪府)ほか

【自句自解】

分厚く切った大根が、艶のある色に煮えていく……。妻が脳梗塞で入院して三年、やつと落ち着き、周囲の指導もあり料理に近いところまで出来るようになった。八十歳を目前に、自分で作ることを大変さの中にも結果を出せた喜びがある。「食は薬に勝る」を学び、旬のものは先ず食べるようにし、「攻めの養生」として予防健康に努めている。ボケ防止にも、日々研鑽あるのみである。

3万葉の野をつれてくる吾亦紅

木山杏理(東京都)

・吾亦紅の古風な感じがよく出ていると思う 西出敏子(千葉県)・吾亦紅は好きな花で「万葉の野をつれて来る」のスケールが大きく万葉集の中に入り込む気持ちです 松山智恵子(宮崎県)・昔の皇子のこと、現代のそれらとの比較文化を望みたい 小俣英之助(大阪府)・万葉の古も吾亦紅を眼前にして新鮮に蘇るといふか 和栗痴龍(新潟県)・万葉の野をつれてくるという表現のたくみさ 山川みどり(山形県)・万葉の野をつれてくるとはステキです 中林恵子(大阪府)ほか

【自句自解】

日本の風土性に親しみ育つ吾亦紅：古き世より人の心を絶えず鼓舞して

止まぬ毅然とした姿勢の吾亦紅：が好き。

派手さはないが相手の壺を百%際立たせる演出力を持ち、今の世に欠けている優しさを問われたら：と思う時、吾亦紅をまず評価したい。

俳句を志して四十年——発見から感動のパイプラインを軸に今後に在りたい。感動なしに人生はあり得ない。

◎その他にも、こんな句・歌が挙げられていました。

9考へて考へ抜いて日短か

松嶋光秋(東京都)

46寒紅を引くとき齡ふと忘る

村松知津子(大阪府)

55知らぬことそれも幸せ花八つ手

坪田勝秀(鹿児島県)

78ローン終え天下晴れての煤払

井上静夫(栃木県)

201朝一番朝日をおがみ無事祈る一日

終えて感謝でねむる

田村淳子(新潟県)

224過去ばかり語る男の寂しがり

石原学(群馬県)

227授けしと受けし責任平和賞

齊藤安弘(神奈川県)

235一目惚れああそれから五十年

勢藤隆(群馬県)

243七十代まさかの坂がそばにある

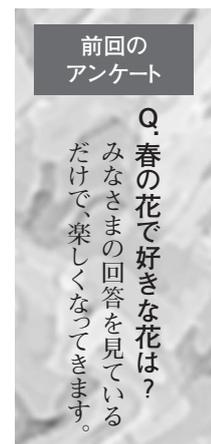
野田明夢(新潟県)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

なお、作品は原稿通りに掲載いたします。楷書にてはつきりとお書きいただくことに、誤字脱字等くれぐれもご注意ください。

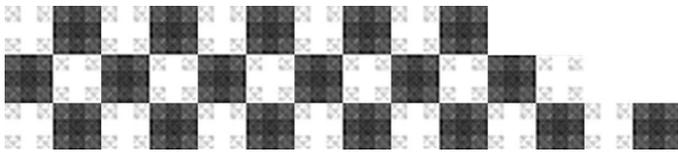
詠み人スクランブル

前回のアンケート Q.春の花で好きな花は？ みなさまの回答を見ているだけで、楽しくなってきました。



- アネモネ 矢野絹枝/竹内ハヤ子 ●あんず 吉澤八千代 ●イチゲ草 雪消えと一緒に春一番に咲き、春を告げる山野草です 高橋トミ子 ●いぬぶぐり 小島岳青/久世しずか/水永ミツコ/大井光隆/佐藤信/森崎榮久/杉浦俊雄 ●梅 大橋恒次/須田洋子/和栗痴龍/とてもかわいく好きです。今日初咲きを見て来たばかりです 近藤はつみ/寺尾令子/吉村筑紫/すべてにすばらしい 津田忠彦/家紋は丸に梅鉢なので神社に咲く梅 梅澤鳳舞/三ツ木宗一/木村俊彦/藤沢樹村/山岸伊久雄/千木良宣行/香りが何とも云えませんが。近くに梅林がありますので毎年でかきます。今は満開ですよ 中村和弘/岩村昇/桜も良いが、矢張り梅 北村富士雄/桜よりも梅が好き。ところが、我が家の老梅が今年の雪で倒れました。大ショックでした 今井勝子/長浜の盆梅は見事です。近隣の梅も楽しみ 奥那於子/いち早く春を告げてくれる梅の花がいいですね 出井静枝/野呂瀬幹雄/池上秀子/小島秀雄/渡邊昭雄 ●エリカ 佐野和彦 ●翁草 清水喜代子/翁草の春蘭 原田麦吹 ●海棠 句集のタイトルにしようと思っています 紺谷睡花 ●カタクリ 百花清/羽黒山カタクリ草に夢もらう 工藤昌見/木暮珣子/小野武雄/高杉杜詩花/中嶋秀次郎 ●クワカス 大場きよし/松葉のような葉の間

- から絵筆が春の色を刷くためにー 安藤まこと ●君子蘭 田中昶/伊藤萬泉 ●辛夷 他の花に先がけて花を開く山野に自生の辛夷 寺尾直真季/土屋喜雄/雪解け溪流の音を聞きながら眺めるのは最高です 井上静夫/牧野桂一/最も春を感じます 中野博夫/小黒深雪/堀井和 ●サイネリア 能條憲夫 ●桜 野木宗信/小野正光/田澤宏/咲散もいさぎよいから 野別忠孝/大久保アヤ子/辻直子/吉田未灰/宮崎正男/藤本由美子/写真撮影を趣味としている者としては、桜は最適な題材 竹内進/河合ヤスエ/田沢義武/早矢仕邦夫/久保和友/古来から桜の花は人々に親しまれ数多くの歌や俳句に詠まれております 浅倉里水/大谷茂/田島星景子/勢藤隆/古郡孝之/来年もと願いつつ家族でお花見です。大橋絵代/長尾俊彦/つばみもよし、満開もよし、葉桜もよし 若月理依子/日本の母校なら必ず一本あり、入学式や卒業式を祝ってくれる 居原田連星/そのものが春です 早川述史/小暮昭司/花の王様桜と申します 沢井博/行本昭子/北岡晃/一にも二にも桜 大竹和男/柚山美峯/桜以外なし 今井温子/稲葉民雄/有本正嗣/諏訪杜夫/佐藤古城/望月哲土/鏡たか子/炭崎博/小田眞佐代/安達輝美/柏田浪雅/池本勇/小山的けし/日本人の心の花 白鳥光雄/吉澤昌美/野田明夢/小原わ子/鰐部好三/中山日出子/回想することが多い 五味田幸夫 ●さくら草 上谷すみゑ/坪田勝秀/濱田イサオ/吉村充治 ●山茱萸 川島久子 ●しだれ梅 藤井碩/関口修一 ●芍薬 神一男 ●春蘭 本間七窪子



うれしいお言葉を頂戴しました

先日『句集 雛かざり』をお手伝いさせていただいた岸本様よりうれしいご連絡をいただきましたので、ご紹介させていただきます。

お母様の米寿のお祝いにと、娘である岸本様が一年以上かけ「母が思い出を楽しめ、子・孫たちがちゃんと読めて、意味が解る形」に編集した、総ルビで写真も130点近くある力作です。岸本様兄妹3人で心を合わせ、さらに娘さんの多大な協力もあり、発行に至りまし



▲『雛かざり』
表紙はお母様の好きなひなげし

た。以下、岸本様の娘さんからのメールです。

母から出来上がりました祖母の句集『雛かざり』を送ってもらいました。大変すばらしい出来で、思わず泣いてしまいました。祖母の優しい人柄が、本によく表れています。

貴社の抱きしめたくなる本作りというコンセプト通り、一族の宝になるような句集になったと思います。家族も喜んでおります。皆様には色々やり取りを重ねることも多く、お手数をおかけしましたが、いつも丁寧に対応していただきありがとうございました。

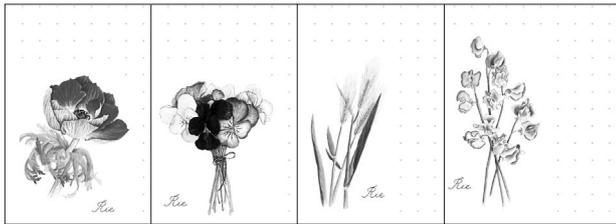
これからも、貴社のますますのご発展をお祈りしています。いい本を生み出してってください。ありがとうございました。
岸本

ポストカード春シリーズ好評発売中！

ご好評いただいています弊社のオリジナルポストカード「春シリーズ」(1セット8枚入り500円)。この度も一枚同封いたしましたので、お気に召されましたら同封のアンケート用紙にご記入のうえ、必要金額分の切手と一緒に封書にてお申し込み下さい。

春…アネモネ、スイトピー、ムギ、ヒヤシンス・黄水仙・ムスカリ、ノビル、タンポポ、ピオラ、オトメツバキ

次号6月号では、夏シリーズも発売予定ですので楽しみにお待ちしております。



「上越詩を読む会」が新聞に掲載されました

弊社で詩誌『詩彩』をお手伝いしている「上越詩を読む会(国見修二会長)」の合評会の模様が、上越タイムズに掲載されました。各人が自作の詩を朗読後、作品を作ったときの思いや改良点などを話し合われたとのこと。5月22日からの来年度の講座では、日本現代詩人協会会長の講演会など9講座が予定されています。



▲最新の『詩彩』7号

スタッフの一言

Q. 春の花で好きな花は？

木戸 敦子



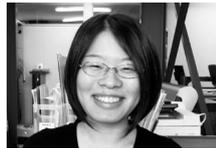
桜…なくせに素直に桜と言いたくないひねくれ者。桜の木の下では三つ編み姿の純真な女学生にも、妖艶な花の精にもなれそうな気がするのです(イメージ画像)。

古川 久美子



ぱっと思いつくのはやっぱり桜。満開の桜の木の下には、さて、何が潜んでいるのやら…？

菅 真理子



梅。それから、とってもいい香りのフリージア! つぼみの連なる様子、なんだか空也像を思い出してしまいます。

仲由 真実



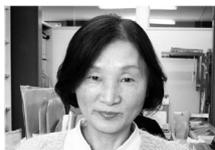
スノードロップ。まだ寒いうちから春を知らせてくれる、うれしい花。育てていないのに、毎年健気に咲いて楽しませてくれます。

上村 真智子



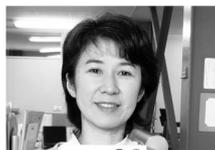
白い木蓮。妖精が木にたくさんとまっているみたい。遠くから見るとウエディングドレスにも見える。中国では戦場のあとにツツジが咲いたとか。ツツジの赤い色は血の色?

金子 ゆり子



小さい頃に小川に咲いていた紫と白のスマリがとても可愛いらしくて、今でも好きな花の一種です。その風景を思い出して懐かしいです。

石山 由希子



梅、沈丁花、さくら、菜の花、れんぎょう…きりがありませんが、れんぎょうは昨秋おじいちゃんが剪定してさっぱりしましたが、蕾がたくさんついていて咲くのが楽しみです。

山田 千秋



花みずき。我が家のシンボルツリーです。ゴールドウエイクの前位に満開になるのですが、毎年ご近所の方々に「いい花付きですね」と誉められます。

吉田 瞳



あのカラフルな発色と形(私は丸いものより少し細身のが好き)やっぱりチューリップですね。そういえば昨日、子供が折り紙で折ってプレゼントしてくれました!

花のいのちは短かくて

和田澄子

私の住んで居ります新宿には、西北部にちよつと張り出た様な位置に落合という地域があります。明治初期までは螢や月見が名物の風光明媚な土地でしたが、関東大地震と西武鉄道の開通を契機として急激に人口が増加しました。大正から昭和にかけて、舟橋聖一・尾崎一雄・吉屋信子等をはじめとした数多くの文学者が居住したことで、落合文化村とも呼ばれるようになりました。中でも林芙美子は昭和五年から亡くなるまでの半生を、この地で暮らしました。

先日、新宿歴史博物館で「林芙美子と落合の文化人たち」という企画展がありました。

その中で、興味を引かれたものを紹介したいと思います。展示物の中の、芙美子から児童文学者の村岡花子へ送られ、氏の遺族宅で保管されていた芙美子自筆の一編の詩稿です。昨年確認されて、有名な「花のいのちは短かくて…」の原典ではないかと話題になりました。

(前部略) 林芙美子

生きてゐる幸福は

あなたも知っている

私も知っている

花のいのちはみじかくて

苦しきことのみ多かれど

風も吹くなり

雲も光るなり

日々の生活で苦しい事は多いが、幸せを信じて、希望を持って進もうという気持が、つたわってきます。

林芙美子の生い立ち、経歴は広く知られていますので、簡単に紹介させて頂きます。

芙美子は明治三十六年に、門司市で、質物などを扱う店を開いて成功した父と、母キクとの間に生まれました。しかし、入籍、認知はされず、私生児として届けられました。その後六才の時に、母と実父の使用人で、後に養父となる人との三人で父の家を出ました。

この後十二才で尾道に落ち着くまでの六年間は、母の実家に預けられたり、親と共に木賃宿を巡りながら続く行商の日々等は、多感な少女時代の流浪体験として、深く心に残ったことと思われます。

尾道に辿り着き、間借りとはいえ定住生活に落ちつきました。明るく積極的で、文才のある芙美子は教師達にもめぐまれ、その助力で女学校に進学出来ました。ここで文学に目ざめ、詩や短歌を地方新聞に載せるまでに育って行きました。友人達も多く居た尾道時代は、後の彼女の文人としての基礎を育んだ貴重な時間だったと思われれます。

大正十一年女学校卒業と同時に、東京の大学に進んでいた初恋の相手を追って上京。ここからが大人の人生の幕明けとなりました。

この後の約五年ほどは女給・女工・店員等職を転々としながら、様々な人間関係の渦の中の恋人との別れ、大震災遭遇など波瀾と困難に満ちた生活を送りました。しかしこの体験が創作の原動力となった事は確かです。又この間も詩・童話の創作、文学仲間との交流、同人誌の発行と積極的に活動していました。

画学生の手塚緑敏と同棲生活を始めた後、詩集・

放浪記等を次々発表し、二十代半ばで芙美子の文運は急激に開けました。文筆活動を続けながら、中国、欧州への旅で、貪欲に見聞を広げてゆきました。

昭和十六年に長年の夢であった「東西南北に風が吹き抜ける」理想の家を下落合に建てる事が出来ました。しかし戦火の拡大と共に創作活動を中止しての疎開生活を余儀なくされました。しかし、この間に本当の家族の絆を求めたのでしょうか、夫緑敏と前年もらい受けた男児を林家に入籍致しました。幸いにも落合の自宅は戦禍を免れたため無事に戻ることが出来ました。

戦後は、戦争によって傷ついた人々を題材にした作品で益々充実した作家生活でしたが、昭和二十六年膨大な仕事を抱えたまま、四十七才で帰らぬ人となりました。

晩年の芙美子は、落合の家で、養父亡き後引き取った母の娘として、正実で優しい夫緑敏の妻として、養子泰の母として、そして何よりも人気絶頂の多忙な実力作家として、生涯で一番安定した倅せな時を過したと思います。

先述の詩稿の横に「花のいのちはみじかくて苦しきことのみ多かりき」の後年好んでよく書いた芙美子自筆の色紙が並んで展示されていましたが、「多かりき」と過去形になっているのに気がついて何故かほつとした気持になりました。

芙美子邸は現在「林芙美子記念館」として一般に公開されており、新宿方面に御越しの際はぜひお立ち寄り下さい。

花散るや芙美子の庭の石仏

澄子

すみずみに風薫りけり芙美子邸

澄子

新潟ぶらり

＊北方文化博物館新潟分館

その人がいまそこにいなくても、その人に会ったことがなくても、その人となりを感じることができる―それは、活字として残された文章であったり、直筆の手紙であったり、愛用の品であったり、またはその人が暮らした家であったりするかもしれない。

會津八一が晩年の十年間を過ごした家が、新潟市中央区南浜通にある。「北方文化博物館新潟分館」として公開されており、私たちもその家の中に入って八一の面影をしのぶことができる。品がよく落ち着いた感じの二階建て洋館。実際にドアを開けてみたり、だいたいな階段をよるよろしなから上がったたり、書齋から庭を眺めたり：気がつくとすっかり大先生・會津八一の気分になつてくる。

歌人・書家として知られる八一。館内にはその歌書が多数展示され、庭には歌碑が建てられている。歌碑に刻まれているのは次のうたである。

かすみたつ はまのまさこを
ふみさくみ かゆき かくゆき
おもひそわかする

〔出典「鹿鳴集」望郷〕

「春の霞が立ち込める砂浜を踏み付けて、行き戻りつして物思いに耽っている」

このうたは、八一が東京に住んでいた頃、ふるさとの新潟で過ごした少年時代を懐かしんで詠んだものといわれる。春の、望郷のうた。春はうきうきする季節でもあるけれど、同時にちよつと物憂い気分にもなることがある。春に思い出すふるさと：うっかり八一の心境に思いを馳せてしまつて、胸がきゅつとなつた。

（菅真理子）



住／新潟市中央区南浜通2番町562
☎／025・222・2262

開館時間／午前10時～午後4時まで
休／毎週月曜日（祝祭日の場合は開館、翌日休館）

特別展入館料／大人550円

＊「會津八一と南浜分館 十年間の記憶展」を六月二十日（日）まで開催

※日時変更の場合もあり

＊白山公園 梅林

雪つりがはずされて、色鮮やかに咲く梅の花々。3月末、新潟市には雪が舞ったが、白山公園の梅林にはすっかり春が訪れていた。人々は花にカメラを向けたり、上の方を指差したりしながら楽しんでいた。

白山公園は、日本最初の都市公園の一つ。明治から、一世紀以上に渡って新潟市民を楽しませている。明治には、尾玉庄八という人が公園守として植物の管理をしていた。彼は商売上手であったらしい。小屋で育てた草花を販売したり、貸し梅や水仙の球根入荷、菊の競技会開催等の広告を出したりしていた。また、植物の管理にも篤かった。公園内の古松「蛇松」の皮をはいで印籠や香箱を作る人がいたので、柵を巡らせ「神木」の高札を立てて樹を守つたという。尾玉の植物への愛情がうかがわれる。

世紀を越えて愛される白山公園。まだ灰色の空の下、健気に色づく梅の花に、百年前の人の情熱と優しさも感じてきた気がする。



参考文献

『新潟歴史双書4 白山公園あたり』
（仲由真実）

白山公園

住／新潟市中央区一番堀通町地先
☎／025・222・2676
交通／バス：「市役所前」下車徒歩

約3分

鉄道：JR越後線「白山駅」
下車徒歩約20分

五番馬鹿

岸本尚毅



春二番三番四番五番馬鹿

三橋敏雄

春先に吹く強風が春一番。その次に吹くのが春二番。春二番までは普通に使われますが、春三番、春四番とはあまり言いません。一番二番以外は、たんなる春の強風ですね。にもかかわらず、この句は三番四番五番としつこく書き並べました。何事だろうと読み進めてゆくと、最後に「馬鹿」とあつて、読み手は呆気にとられます。この句は漫才のような作りです。

「君、春一番は知ってるか。」

「馬鹿にせんとつて。」

「それやたら春二番は？」

「一番の次に吹くやつやろ。」

「そうや。二番があるということは、三番四番五番もあるということや。今日あたりもう十番くらい行つてんのやないか。」

「アホらし。やめさせてもらうわ。」

この漫才のようなやりとりを一人で演じたのが「春二番三番四番五番馬鹿」という句です。一人でボケて一人で突っ込んでいるのです。

ではこの句は言葉の遊びだけかというところではなくて、いくたびもの強風の日を経て春本番になってゆく季節の移ろいはきつちりと捉えられています。

前回1回目の岸本様のエッセイ「ああこりゃこりゃ」は、とても面白かったと大好評。「実際に声に出して読んでみました」というアンケートを多く頂戴しました。さて、今号は……!

三橋敏雄という俳人には、滑稽でありながら物事の本質を捉えたすぐれた作品が多い。たとえば、

ふるさとや多汗の乳母の名はお福

三橋敏雄

汗ばんだふくよかな乳房を連想させる句です。多汗症の多汗という言葉は即物的であり、一方、お福という名前はお多福を連想し、滑稽味があります。一句の味わいは非常に複雑です。

夏百夜はただけて白き母の恩

三橋敏雄

へはただけて白きンまではドキツシますが、へ恩ンという一字によつて、この句は観音様のような風情になります。

こういう句を見ると、三橋敏雄という俳人は本当に天才的だと思います。

会社には大小あれど夏終る

三橋敏雄

動植物の世界と同様、人間社会には大会社があれば、小さな会社もあります。ふざけたようでありながら、一つの真理を語った句ともいえます。

姿ある鬼あはれなり鬼やらひ

三橋敏雄

節分の鬼に扮した人が哀れで滑稽です。滑稽であります。が、慄然とする句でもあります。「姿ある鬼」はにせものの鬼です。本当の鬼は姿なき鬼なのです。人の心に潜む魔性、あるいは怨霊か。そう考えると怖い句でもあります。滑稽で怖い。そこに三橋敏雄の真骨頂を見ます。

プロフィール

1961年 岡山県生まれ。1979年 東大学生俳句会入会。小佐田哲男、有馬朗人、山口青邨の指導を受ける。結社誌は「渦」「青」「ゆう」に参加（いずれも終刊）。現在「天為」「屋根」同人。句集に『鶏頭』『舜』『健啖』『感謝』。著書に『名句十二か月』『俳句一問一答』『俳句の力学』などがある。第16回俳人協会新人賞、第23回俳人協会評論新人賞を受賞。

2010. 4. vol.49 (2010年4月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋 7-17
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
喜悲哀楽書房 株式会社ミュージズ・コーポレーション
0120-819-395
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

編集後記
巣立ちの季節。親戚が多いので毎年のように順番に巡ってくるが今年
は姪っ子。親と涙々の別れを経て、でも「早く友達を作って大学生活に慣
れたい」と前向きなメール。一方母親からは「もう抜け殻…」と落胆した
メール。どちらも真実だけど、まだ片方しか経験していない。母は4回もこ
んなことを経験したのかとその忍従ぶりを称えたい。来年はうちの番か
…。飲食店で見た、賢明なのに間違えて店長に怒られていた同じ年頃の女の子の姿が重
なる。心の準備はできないだろうから、せめて優しく接したい。よき隣人として。(木戸敦子)